

はじめに

1980年大阪大学文学部入学、1979年9月金子武蔵訳『精神の現象学〔下〕』刊行
膨大な2つの「訳者註」、金子さんは「索引」を「精神の家」と題されていた

修士課程（大阪大学人間科学研究科）徳永恂さんはアドルノ／ホルクハイマー『啓蒙の
弁証法』の、茅野良男さんは『杣径』の翻訳のさなか

アドルノ、ベンヤミン、ハンス・ヨーナス、イルミヤフ・ヨベル、ローゼンツヴァイク、
ツェラン、イツハク・カツェネルソン

現在『アーレント＝ショーレム往復書簡集』を院生と翻訳中
金子さんの仕事に接して以来感じてきた「翻訳者の使命」

1 ベンヤミン「翻訳者の使命」をめぐって

ベンヤミン（1892年生）はハイデガーと同世代
ナチズム・コミュニズム・シオニズムの温床としての青年運動

ベンヤミンは1923年仏独対訳形式でボードレール『悪の華』の「パリ風景」を出版
その序文が「翻訳者の使命 Die Aufgabe des Übersetzers」（執筆は1921年）

不純な原作の言葉を浄化する「純粹言語 die reine Sprache」を求める翻訳
マラルメ「詩の危機」、地上の言語に対して「最高の言語」を想定

不純な言語（フランス語）からもう一つの不純な言語（ドイツ語）へ、しかし原作は一
瞬でも牢獄の外の空気を吸う、地上の言語から解き放たれることをもとめる原作

an sich、für sich、an und für sich／即自的、対自的、即且つ対自的、その不自然な日本語
は日常語への揺さぶりを最大限受け取るもの、思考のための「最高の言語」の模索
Gewissenを「良心」ではなく「全的に知ること」と訳された金子さんの態度

2 言葉の流刑地、あるいは流刑地の言葉

言葉が流刑に遭っている場所？ 元来言葉は人間の流刑地？
「言葉は存在の家である」との対照性？

ハイデガーの講演「言葉」の冒頭、ハイデガーの過剰な語り
「言葉は語る Die Sprache spricht」、「純粹に語られたものは詩である」
トラークルの「冬の夕べ Ein Winterabend」の解釈

「言葉が語る」→ ①語源へ遡る解釈、「ただいま！」⇨Just now!、「こんにちは」⇨As
for today? 日本語ネイティブではない者こそが持ちうる視点

「言葉が語る」→ ②作者の意図ではなく、作品の言葉それ自体に耳を傾ける態度
「痛みは敷居を石と化したり」という1行をめぐって

トラークルの特異性、ハイデガーの同世代、第一次世界大戦のトラウマ的体験、27歳での自殺、カール・クラウスとも親交、ハイデガー・トラークル・クラウス・ベンヤミン

わずか4語からなる1行の解釈

「冬の夕べ」は定住者と放浪者の関係を描いたもの、痛みによって石と化した敷居を放浪者は越えることができるのか

ハイデガー的解釈の危うさ、解釈者の腹話術になる可能性

「手相見の真実」、プロの手相家の言葉、向こうから兆候的に示されているものの解釈
詩の解釈にもあてはまる、詩の言葉を思索の言葉へと翻訳するハイデガー

3 石原吉郎における記憶と言葉

石原吉郎（1915-1977）、62年の生涯、8年間のシベリア抑留
39歳（1954年）で詩壇デビュー、第1詩集『サンチョ・パンサの帰郷』（1963年）

1970年前後、一連のシベリア・エッセイの執筆 → 『望郷と海』
石原の詩はシベリア・エッセイと結びつけて理解されるようになる

詩とエッセイはいったん切り離されるべき
『サンチョ・パンサの帰郷』の巻頭詩、「位置」（初出1961年）

戦場における兵士の姿？ 銃殺の光景？ キリストの磔刑の描写？
具体的な場面としてはなにも描かれていない、「位置」という言葉の内面的展開

位置、敵、姿勢、挨拶、声といった漢字・漢語の布置関係としての詩
それぞれの語が新しい意味を獲得する意味生成の現場＝根源的な意味を回復する場

それらの言葉の布置関係を可能にしているのが抑留体験
しかし、石原が記憶していたものではなく、それらの言葉が記憶の主体だった

初期の詩はシニフィアンとシニフィエの幸福な一体化を体現
シベリア・エッセイの執筆はそこに外科手術を施すことに等しかった

ロマンス語系のカタカナを軸にした作品、エスペラントの影響
漢字・漢語の抱える記憶の重力を断ち切る作品、代表作「自転車にのるクラリモンド」（初出1955年）

漢字・漢語の重力とカタカナの浮力
言葉が相互に翻訳し合いながら「天上の言葉」へ上昇してゆく感覚

「詩がおれを書きすてる日が／かならずある」（「詩が」初出1960年）

アルコール中毒、深夜の迷惑電話、切腹のまねごと……